

# 保育所における精神疾患等を有する保護者及びその子どもへの支援に関する予備的調査

## Preliminary Survey about the Care for Parents with Mental Disorders and Their Children at Nursery School

赤瀬川 修  
Osamu Akasegawa

鹿児島女子短期大学

保育所等に勤務する保育士等による、精神疾患を有する保護者とその子どもに対する支援の現状や課題を大まかに把握し今後の研究デザインを構築することを目的として、Q市の保育所等に勤務する保育士等を対象として質問紙票を用いた予備的調査を実施した。精神疾患もしくは精神的な不安定さを持つ保護者の下で生活する子どもに対する支援経験は、園長・副園長・主任などの管理職や21年以上の保育士経験のある者が多い傾向にあった。また保護者の有する精神疾患は、適応障害や気分障害が多い傾向にあった。子どもの抱える問題としては、生活リズムの乱れや行動面の問題があげられ、保育士等による個別的で丁寧な関わりや自尊感情の向上を意識した関わりがなされていた。保護者が抱える問題としては、保育士との関係形成の問題及び夫婦、家庭環境の問題があげられ、保育士等による丁寧な相談対応、前向きに子育てに取り組めるような配慮などがなされていた。また、これらのケースに対しては園内職員での連携のもとで対応する事例が多かった。一方で、外部の関係機関との連携は限定的であり、医療・保健機関との連携を図るケースが少ない傾向にあった。

**Keywords** : Mental disorders, Nursery teacher, Nursery school, Support for guardians

**キーワード** : 精神疾患, 保育士, 保育所, 保護者支援

### 1. はじめに

児童福祉施設における保護者支援の重要性は、児童福祉法及び保育所保育指針、児童養護施設運営指針などにおいて明示されており、子どもの最善の利益の保障、子どもの福祉の向上を目指して、それぞれの保育所、認定こども園、児童養護施設等において保育士などにより展開されている。

保育士が保護者から受ける相談内容や、子どもの家庭が抱える生活課題は多岐にわたる。その中でも子どもの成長、自立、発達に関することであれば、直接的もしくは間接的にそれらの悩みや生活課題に対してアプローチしその解決にあたることになる。

筆者は、精神疾患を有する保護者とその子どもに対する支援方法の確立及び保育士養成校における教育内容・方法の確立を目指し研究を行っている。今回の研究は、日々保育所等において保育実践と保護者支援にあたる保育士等を対象として質問紙票(アンケート)による調査を行い、保育士等の職員は、精神疾患を有する保護者に対してどのような支援を行っており、保育士らはどのような課題を抱えているのか実態を大まかに把握し今後の研究デザインを構築することを目的として行うものである。

### 2. 研究目的・方法及び内容

#### 2-1. 研究目的

本研究は、保育所等で子どもや保護者支援にあたる保育士等による、精神疾患を有する保護者とその子どもに対する支援内容、支援上の課題を大まかに把握し、今後の研究の基礎資料とすることを目的として行うものである。

#### 2-2. 研究方法および内容

2019年8月にQ市で開催された保育所職員を対象とした研修会の場において、筆者が本調査の目的、方法、内容、個人情報に関する配慮等について説明し、調査協力の上承を得られた者を対象にアンケート調査を行った。66名より回答を得られた。アンケート調査用紙の内容は、以下の通りである。

質問1 「勤務する施設」について…保育所, 認定こども園, その他から選択

質問2 「職種・役職」について…保育士(常勤), 保育士(非常勤), 保育士(その他), 保育教諭(常勤), 保育教諭(非常勤), 保育教諭(その他), 栄養士, 調理員・調理師, 看護師・准看護師, 園長・所長, 副園長, 主任, 副主任, 事務職員, その他, から選択

質問3 「現在の職場での勤務年数」について…勤務年数を記入

質問4 「同職種の通算勤務年数」について…勤務年数を記入

質問5 「今までの保育所・認定こども園勤務経験の中で, 精神疾患(発達障害・知的障害を除く)を有する保護者・精神的な不安定さをもつ保護者のもとで育つ子どもの保育・支援をした経験はあるか」…担任としてある, 担任以外の役割としてある, ない, から選択. 担任としてある及び担任以外の役割としてある場合は質問6の質問に進む.

質問6 「誰がどのような精神疾患を有していたか, すべてに○をつける. 2ケース以上担当した場合は, 特に印象に残る2つのケースを選び記入する」…①誰が病名を知っていたか, ②病名不明等の場合は「病名不明・記憶にない, 情緒が不安定だった, 医療機関未受診(と思われる)」から選択. 病名を知っている場合は「アルコール依存, 薬物依存, ギャンブル依存, ゲーム依存, 産後うつ病, うつ病, 強迫性障害, 睡眠障害, 摂食障害, 双極性障害(躁うつ病), 適応障害, 統合失調症, 認知症, パーソナリティ障害(人格障害), パニック障害/不安障害, その他から選択する.

質問7 「それぞれのケースでどのような生活課題があり, 支援を行ったか」…①子どもが抱える問題はどのようなことがあったか, ②保護者が精神疾患以外に抱える問題はどのようなことがあったか, ③子どもに対してどのような支援を行ったか, ④保護者に対してどのような支援を行ったか, ⑤園内で協力した者, ⑥連携して対応した機関

質問8 「精神疾患や精神的な不安定さを抱える保護者とその子どもの保育・支援を行い, 困難に感じたこと, 困ったこと, 不安に感じたこと」(自由記述)

### 3. アンケート調査結果

#### 3-1. 回答者の特性

66名から回答を得られた. 回答者の所属する施設は全員が保育所であった. 職種・役職は, 保育士(常勤)が48名, 園長2名, 副園長4名, 主任3名, 副園長・主任兼任1名, 栄養士6名, 調理員・調理師1名, 事務職員1名であった.

保育士(園長・副園長・主任を含む)の経験年齢(他施設での保育士経験含む)は, 5年ごとの分類では「1~5年」11名(保育士のうち19.0%), 「6~10年」14名(24.1%), 「11年~15年」5名(8.6%), 「16~20年」9名(15.5%), 「21~25年」10名(17.2%), 「26年以上」9名(15.5%)であった.

#### 3-2. アンケート調査結果

質問5「今までの保育所・認定こども園勤務経験の中で, 精神疾患(発達障害・知的障害を除く)を有する保護者・精神的な不安定さをもつ保護者のもとで育つ子どもの保育・支援をした経験はあるか」について, 保育士, 園長, 副園長及び主任の回答は「経験あり」13名, 「経験なし」40名, 「無回答」5名であった. また保育士(管理職以外)は「経験あり」9名, 「経験なし」35名, 「無回答」4名であり, 園長・副園長・主任(管理職)は, 「経験あり」4名, 「経験なし」5名, 「無回答」1名であった. その他職員(栄養士・調理師・事務職員)は8名全員とも「経験なし」であった.(表1)

また, 保育士経験年数ごとに見てみると, 保育士経験10年未満の職員の支援経験者が25名中4名(16.0%), 11年以上20年未満の職員の支援経験者は14名中1名(7.1%), 21年以上の職員の支援経験者は19名中8名(42.1%)と, 21年を超える保育士に支援経験者が多い傾向があった.(表2)

支援を経験をした13名のうち, 「担任」として経験した者が8名, 「担任以外」として経験した者が4名(園長1名, 主任1名, 無記入2名), 無回答1名であった.

表1 精神疾患を有する保護者・精神的な不安定さを持つ保護者のもとで育つ  
子どもの保育・支援経験の有無(職種・役職ごと)

職種・役職	経験あり	経験なし	無回答	合計
保育士(常勤)	9名(18.8%)	35名(72.9%)	4名(8.3%)	48名(100%)
園長・副園長・主任	4名(40.0%)	5名(50.0%)	1名(10.0%)	10名(100%)
合計	13名	40名	5名	58名

表2 精神疾患を有する保護者・精神的な不安定さを持つ保護者のもとで育つ  
子どもの保育・支援経験の有無(保育士勤務年数ごと)

保育士勤務年数	経験あり	経験なし	無回答	合計
1年～5年	1名(9.1%)	10名(90.9%)	0名(0.0%)	11名
6年～10年	3名(11.5%)	11名(78.6%)	0名(0.0%)	14名
11年～15年	0名(0.0%)	4名(80.0%)	1名(20.0%)	5名
16年～20年	1名(11.1%)	6名(66.7%)	2名(22.2%)	9名
21年～25年	4名(40.0%)	6名(60.0%)	0名(0.0%)	10名
26年以上	4名(36.4%)	3名(33.3%)	2名(22.2%)	9名
合計	13名(22.4%)	40名(69.0%)	5名(8.6%)	58名

質問6では、質問5において「担当として(経験が)ある」もしくは「担任以外の役割としてある」と回答した13名の保育士に対して、「誰がどのような精神疾患を有していたのか」質問した。12名より16ケースについて回答があり、そのうち精神疾患を有していたものは「母親」13名、「父親」0名、「無記入」3名であった。また、精神疾患の種類については「適応障害」が7名ともっとも多く、続いて「うつ病」(3名)、「双極性障害」(3名)、「病名不明(情緒不安定)」(3名)、「発達障害」(2名)、「強迫性障害」(1名)、「ADHD」(1名)であった。(表3)

なお今回の調査においては発達障害及びADHDは、研究対象外であるためそれらを除外した13ケースについて分析することとした。

表3 保護者はどのような精神疾患を有していたか(重複回答)

	疾患名・状態等(人数)	合計
疾患名	適応障害(7名)、うつ病(3名)、双極性障害(3名)、発達障害(2名)、ADHD(1名)、強迫性障害(1名)	17名
疾患名不明	情緒の不安定さ(3名)、医療機関未受診(1名)	4名

質問7ではそれぞれのケースにおいてどのような生活課題があり、それに対しどのような支援を行ったか質問した。(表4)

子どもの抱える問題としては、保護者の体調次第で登園が出来ない、登園時間が遅くなる、生活リズムが整っていない、睡眠不足、朝食未摂取といった「生活リズムの乱れの問題」や、落ち着きがない、集団行動が苦手、自信がなく指示待ちなどの「行動面の問題」があげられた。そして、「子どもに対する支援内容」としては、個別に話をしっかり聞くこと、スキンシップをとること、褒めて自信を持てるように関わるなど「個別的で受容的な関わり」や「自尊感情を高めることを意識した関わり」が行われていた。

次に保護者が抱える問題としては、保育士との関わりを避ける、保育士に対する依存傾向などの「保育士との関係形成の問題」、離婚や夫からの暴力などの「夫婦、家庭環境の問題」などがあげられていた。そして「保護者に対する支援内容」としては、心配や悩みごとを聞く、時間を設け話を聞く、個別に面談を行うなどの「丁寧な相談対応」、ポジティブな会話をし、子どものことは良いことだけを伝えるなどの「子育てに前向きに取り組めるような配慮」などが行われていた。

また、園内で協力した者としては、ほとんどのケースにおいて「園長」、「主任」、「副園長」、「その他の保育士」、「全職員」があたり、園長、主任などを含めた園内職員の連携のもとで対応するケースが多かった。「連携して対応した機関」としては、市役所が5ケースと最も多かった。病院や保健所および子育て支援センターは1ケースであり、連携がない

ケースは2ケースだった。

表4 ケースごとの生活課題、支援内容など

項目 ケース	回答者の属性 ※1	疾患等を有する者	疾患名等	子どもの抱える問題	保護者が抱える問題	子どもに対する支援内容	保護者に対する支援内容	園内で協力した者	連携して対応した機関
1	保育所保育士	未記入	適応障害	保護者の体調で登園ができない時もある	苦手な保育士をさける	一対一で関わり話を聞く	子どもについての心配や悩みを聞く	園長・担任・全体で	市役所 病院
2	保育所管理職	母親	情緒不安定 医療未受診 適応障害						
3	保育所管理職	母親	うつ病						
4	保育所保育士	母親	情緒不安定 双極性障害	落ち着きがない 集団行動苦手	体調不良、 保育士・行政との関わりをさける	愛着心が強い	いろいろな話をするが受け入れない	園長・主任	市役所
5	保育所保育士	母親	双極性障害	人への関心がない 感情の起伏が激しい		精神的に落ち着いた状態が続くようスキップをとる	明るく挨拶するなどポジティブな会話を心がける	保育士	子育て支援センター
6	保育所保育士	未記入	双極性障害		父親からの暴力	家庭での話を聞く	時間を設け困りごと・家庭のことについて聞く	園長、副園長、主任	市役所、保健所
7	保育所保育士	母親	うつ病 適応障害						
8	保育所保育士	母親	うつ病 適応障害						
9	保育所保育士	母親	うつ病	自信がなく指示待ち		笑顔で関わる、待つ	子どもの良いことだけを伝える	園長・副園長	
10	保育所管理職	母親	情緒不安定	生活リズムが整っていない 睡眠不足 朝食未摂取	地元に戻ったばかり	登園時に子どもの姿から気づくことがないか見る	不安や不満を訴えてくる際に、時間を作り、とにかく聞いた	園長、担任保育士、その他保育士	
11	保育所保育士	母親	適応障害						
12	保育所管理職	母親	適応障害	生活リズムが不安定 登園時間が遅くなる	意思が伝わらない 行事参加できない	褒めて自分に自信がもてるような言葉かけ	個別に面談を行う	全職員	市役所
13	保育所管理職	母親	適応障害	生活リズムが不安定 登園時間が遅くなる	一方的な話がなかなか終わらない	褒めて自分に自信がもてるような言葉かけ	個別に面談を行う	全職員	市役所

※1 園長・副園長・主任を管理職とする

質問8では、精神疾患や精神的不安定さを抱える保護者とその子どもの保育・支援を行い、困難に思ったこと、不安に感じたことについて自由記述で回答してもらい、3名より回答があった。(表5)

表5 保育・支援に行い困難に感じたこと、困ったこと、不安に感じたこと(自由記述)

No.	対応したケース	回答内容
1	ケース1	関わり過ぎても良くないし、離れすぎ(つきはなし)でもいけない まわりの理解が不十分で対応に困った(保育士より対応が違う) すぐには良くならないので気長に付き合っていく
2	ケース6	関係づくりが難しい
3	ケース7	子どもの変化は、変わりなくであったが、母親の日々の表情が違ったので心配だった

### 3-3. 調査結果の分析

精神疾患を有する保護者・精神的な不安定さを持つ保護者のもとで育つ子どもの保育・支援経験の有無については、園長・副園長・主任といった管理職・中間管理職や、保育士勤務経験21年を超えるベテランの保育士が、保育・支援経験が多い傾向にあった。勤務経験が長くなるほど、さまざまなケースへの対応経験を重ねていくため当然の結果かと思われる。しかし、11年から20年の保育士勤務経験がある中堅保育士は、保育・支援経験をした者が初任者よりも低かった。役職や経験年齢ごとの傾向を把握するためには、今回の調査数では不十分であり今後さらに多くのデータを収集する必要があるだろう。

まず、ケースとしてあげられた16ケースにおいて、精神疾患を有する保護者は、母親(及び未回答)だけであり父親との回答がなかった。しかし、精神疾患を有する父親のケースが実際に全く無いとは考えられにくく、父親の精神疾患に関する情報を保育所が把握することの難しさを感じる。また、保育士がそれを課題として捉えていない可能性もある。

保護者の精神疾患の傾向としては、適応障害がもっとも多かった。適応障害は、明確なストレス因子により、抑うつ状態や不安状態、攻撃的な行動が一時的に引き起こされた状態であり、ストレス因子がなくなることや薬物療法などにより症状が無くなることもあるが、長期化し気分障害(うつ病や、双極性障害など)や神経症性障害・ストレス関連障害および身体表現性障害に移行することもあり、ストレス因子を取り除くための環境調整、カウンセリング、必要に応じて薬物療法が必要となる。ストレス因子は、個人によって多様であるが、子育てやそれに関連する様々な出来事がストレスを生み出し深刻化させている可能性がある。ストレスを軽減させ、適応障害からの早期の回復を目指すためにも、保護者支援にあたる保育所の役割は大きいと考えられる。

次に気分障害であるうつ病・双極性障害が多い結果となった。うつ病の2ケースは適応障害も併発しているため、適応障害からうつ病へと移行した可能性も考えられる。薬物療法や心理社会的療法などが治療の中心となるが、うつ病を抱えながら子育てするためには、家族や周囲の理解と協力が欠かせない。保育所においては保育により保護者の育児負担を減らすとともに、保育士が保護者の理解者となり子育てのパートナーとしての役割を果たすことが求められている。

ケースごとの生活課題と支援内容については、子どもの抱える問題として、生活リズムの乱れや行動面の問題があげられていた。子どもに対する支援内容としては、個別的で丁寧な関わりや自尊感情を高めることを意識した関わりがなされていた。保護者が抱える問題としては、保育士との関係形成の問題及び夫婦、家庭環境の問題があげられ、支援内容としては個別の丁寧な相談対応、子育てに前向きに取り組めるような配慮などが行われていた。また、園長や副園長及び主任を含めた園内の連携のもとで対応しているケースが多かった。連携して対応した外部機関としては、市役所が5ケースと最も多かったものの、病院や保健所、子育て支援センターは1ケースであり、連携がないケースは2ケースであった。連携する機関の数は限定的であり、精神障害者支援の際に重要な役割を持つ精神科医療機関や保健所と連携するケースはわずかであった。

最後に、子どもの保育や保護者支援にあたる上での困難さとしては、保護者との関係づくりの難しさや、日々変化する保護者の病状の変化への戸惑い、保育士などの理解の不十分さによる対応のバラつきなどがあげられた。保育士養成課程において、今回のケースであげられていた適応障害やうつ病、双極性障害などの疾患に関する知識、その治療や支援に関する教育は十分なものではない。保育士の抱える課題を解決するための方策としては、保育者に対する精神疾患等に関する教育の充実及び、保育所・保育士と医療・保健機関が連携して地域全体でケースへの対応する体制づくりであると考えられる。

#### 4. 研究成果と課題

本研究は、予備的調査として行われたものであるため調査数は不十分だが、少なくとも一つの市における保育所における精神疾患を有する保護者とその子どもの実態や支援の現状を示すことができた。今回の調査では、保育士らが精神疾患を有する保護者・精神的な不安定さをもつ保護者のもとで育つ子どもとその保護者の支援に保育所・保育士が対応することはまれな事ではないこと、保護者の有する疾患は適応障害や気分障害が多い傾向にあること、保育所では園内での連携のもとで子どもと保護者とその子どもの支援にあたっている一方で、外部機関との連携には課題が残ることなどが示されたといえる。

しかし、調査数が少ないため数量的な分析をするには不十分である。またケースの分析についてもそれぞれのケースを担当した保育士などへのヒアリング調査などを実施していないため、分析をするには不十分といえる。本研究の目的を果たすためには、量的調査・質的調査の両面からのアプローチが必要であり、今回の予備的調査の結果をもとに研究プロセス及び調査方法の再検討を行い、研究デザインを構築し研究を進めていきたい。

#### 謝辞

本調査及び研究をするにあたり、ご協力をいただきましたQ市の保育所職員の皆様方に、心より感謝の意を表します。

#### 参考文献

- (1) 松宮透高「精神疾患のある親による子育て世帯支援における社会福祉の役割」社会福祉研究 (125), 84-90, 2016.
- (2) 吉田敬子・長尾圭造「養育者に精神疾患がみられる場合の虐待事例への支援—支援スタッフに潜む問題と周産期からの予防—」子どもの虐待とネグレクト, 10(1), 83-91, 2008.
- (3) 川上憲人「精神疾患の有病率等に関する大規模疫学調査研究：世界精神保健日本調査セカンド 総合研究報告書」2016.
- (4) 夏苺郁子「精神疾患の親を持つ子どもが抱える困難」精神科臨床サービス17(2), 124-129, 2017.
- (5) 中村ユキ「子どもの成長への支援とリカバリー」精神科臨床サービス17(2), 130-133, 2017.
- (6) 土田幸子「『親&子どものサポートを考える会』の取り組み」精神科臨床サービス17(2), 134-138, 2017.
- (7) 伊藤恵理子「子どもが安心して暮らせる地域をめざして」精神科臨床サービス17(2), 151-156, 2017.
- (8) 只野文基・鎌田奈々子・加藤ますみ「家庭の養育機能と児童の精神保健—精神障害を持つ養育者と児童期の精神保健に関する検討」明治安田こころの健康財団研究助成論文集(36), 86-95, 2000.
- (9) 中村ユキ「精神疾患の親がいる家庭と子どもの虐待」子どもの虐待とネグレクト 14(3), 335-339, 2012.

(2019年11月26日 受理)